

図書館だより

北海学園大学附属図書館報 第27巻3号(通巻175号) 2005.10.31

vol.27

NO. 3

Bulletin of the Hokkai-Gakuen University Library

井上真蔵

2 異文化の中の図書館



上村仁司

3 ドストエフスキー『白痴』を読もう！

若月秀和

4 私の読書歴と現在の研究課題の関係

松崎博季

5 Javaとオブジェクト指向プログラミング

6 図書展示会の歩み

穴澤 務

8 読書が苦手な方々へ — 休息のための読書 —

異文化の 中の 図書館

文=井上真蔵

(いのうえ しんぞう/人文学部教授)

時は1969年、場所は三鷹の国際基督教大学 (ICU) である。ICUそのものも、日本の中では異文化であったが、その図書館もハードとソフトの両面において異文化と言えるものであり、若き魂に強烈な衝撃を与えるものであった。

まずは、独立した3階建ての建物を入ると、ホールでコートは脱がねばならない。コートラックがあるだけで、管理人も居なければ鍵もついてはいない。入館時に脱いだコートが、退館時にもあるのだ。これだけでも強烈な異文化衝撃であった。

さらに驚くのは、全てが開架式で本を手にとることができたことである。と言うのも、当時は私立であれ国公立であれ、大学の図書館は閉架式であり、受付で希望の本を請求して初めて本に出会うという訳であった。さらに本棚に並ぶのは、6割程度が和書、4割程度が洋書であったのも驚きであった。

次なる驚きは、本棚に同じ本が10冊、20冊と並んでいる光景である。同じ本が多数並んでいるのは、それまでには見た事もない。教員が指定した本なのである。手に取ってみると、どの本も手垢がついて多数の学生が手にした証しが残っている。

地階に降りると、院生用にキャレレル (個人用デスク) が設けられている。ここには借りた本や自分の本を置いておくことができる。仕切りも鍵もない窓際の席であり、そこに置かれた本は悪意があれば持ち去ることも可能である。

さらに授業が始まると、オーバーナイトの存在を知ることになる。これは翌朝の7時半までに返却する制度である。つまり必要に応じて、多数の学生が読めるようにと授業で指定される本である。

また期限までに返却しない場合は、延滞料がつく。額は確か1日につき10円だったと記憶している。こ

の延滞料の通知は、大学本館の玄関ホールにある学生用のメールボックスに届けられるのである。そして延滞料の支払いを済ませておかないと、2学期、3学期と次の学期の登録ができない。さらに、このメールボックスには、新刊書の貸出し予約をした場合なども、その通知が届けられるのである。

これら全ては初めてのことばかりで、まさに異文化であった。しかし、いま振り返ってみると、そこには大学における「図書館の位置付けと思想」を感じない訳にはいかない。まず、「図書館の本は、読まれるために存在する」と言うことである。こう言うのは簡単だが、それを実現し実際に運営していくために上述の様な様々な仕組みと知恵が組み込まれていたのである。そして、当時の開館時間は夜の11時までであったが、夜間はキャンパス内の寮生たちのアルバイトであった。

このような図書館の存在は、ICUという極めて特殊な大学という事情によるものであろう。簡単に言えば、リベラル・アーツを理念とする小規模 (当時は院生を含めて1200人程度) なキリスト教の大学ということである。そして、この小規模なコミュニティーを動かすソフトは、上述のメールボックスというハードに如実に現れている。1200名の一人ひとりの学生に、このメールボックスが与えられ、図書館からの連絡を含め、大学からの連絡に用いられていた。それだけでなく、学生の間でも、クラスを越え学年を越えて用いられていた。このような日常の行為から、同じコミュニティーの構成員だという意識を共有し、自分達が属するシステムを維持していこうという事を意識的にあるいは無意識的に感じていたのだと思われる。

ドストエフスキー

『白痴』を読もう!



文= 上村 仁司

(うえむら ひとし/経済学部教授)

私は昔から小説を読むのが好きで、漱石、芥川、太宰などを中学生の時によく読みました。彼らの小説の主人公は皆エゴイズムの問題に悩み、自分の心の奥には悪が棲みついていると考え、この悪を駆逐し、正しい生き方をしようと模索します。ではこのようなモチーフはどこから来たのでしょうか。

それは、明治以降の作家がおしなべて影響を受けた十九世紀ヨーロッパのリアリズム小説に由来しています。明治以前の作家はエゴイズムに悩む人間など描きませんでした。明治維新以降、日本のインテリ達が触れたヨーロッパ文学には、一様に善と悪の問題に悩む人間が主人公として据えられていたのです。近代ヨーロッパ芸術は善と悪の問題を追及することを共通の主題とします。その主題にそった手段として最も有効であるとされたのが写実主義、すなわちリアリズムです。人間をリアルに見、その本性をありのままに描く。では人間の本性とは何でしょうか。

彼らは皆人間の本性を悪と見なしたのです。このような人間観をヨーロッパの文学者が抱くのは当然です。なぜなら彼らはキリスト教的素養を持ち、そのキリスト教は基本的に人間を悪いものとして捉えるからです。それはアダムとイブの楽園追放に象徴的に表わされます。人間は皆原罪を背負っているのです。しかしこのような宗教的フィルターを通すまでもなく、私たちの周囲を少し注意深く見れば、人間がいかに悪い生き物であるかは容易に理解できます。いいえ、何も周囲を見る必要などありません。誰しも自分の心の奥底を見つめれば、即座に暗くずるい自己を発見できるでしょう。ですが人間の心の中は悪ばかりというわけではなく、そこには良い自己もあるわけです。私たち日本人は、善も悪もひっくるめ

た混沌たる世界をごく自然な状態として肯定する心性を持っています。しかしヨーロッパの人達は善と悪を厳しく峻別し、悪を完全に駆逐し、純粋なる善を見出すことに命がけの戦いをしてきました。この戦いを完遂するためには自分の中の悪を容赦なく描き出すことがまず必要です。こうしてリアリズム小説が誕生したわけです

リアリズム小説の最高峰はドストエフスキーであると私は思っています。彼の描く主人公は皆、善と悪の問題に悩みますが、典型的なのは『白痴』でしょう。主人公ムイシュキン公爵は「完璧なよい生き方」を実践しようとします。結果的にその試みは失敗するのですが、主人公の純粋なる善への追求の試みは圧倒的な迫力で描き込まれます。ドストエフスキーは、異常な執念深さで善と悪の問題を追及しました。脅迫観念的とも言えるこの執念が、壮大かつ深淵な悲喜劇を生み出したのだと私は思います。ドストエフスキーは善と悪の相克の問題に対して答えを出しません。ですが読者は、人間とは、純粋なる善を達成することはできないと承知しつつも、その状態の実現を信じざるを得ない生き物なのだ、ということを経験から学びます。現実理想を嘲笑します。それでも理想の追求をやめることのできない人間のおかしさと哀しみが彼の作品から伝わってくるのです。

読書とは作家との格闘です。私たち日本人が西洋人の書いた本を理解できるのは、西洋式格闘のルールを明治維新以降必死になって勉強したからです。所詮頭で覚えたルールですから、その格闘もさほど本格的なものとは言えないかもしれません。ですがとにかく一読を薦めます。読まずに死ぬのはあまりにもつたいない! 本を読むのは(長いですから)しんどい、という人は黒澤明が映画化していますから、それを観て下さい。

私の読書歴と

現在の研究課題の関係

文=若月秀和

(わかつき ひでかず/法学部講師)

私は講師という立場上、講義やゼミの場で、学生たちに読書をするように勧めている。しかしながら、どうやら、学生たちは全般的に、読書をするのが少ないようである。彼らの周囲には、携帯メールやインターネット、ファミコン、テレビなどなど、読書よりも関心や欲望を刺激するものが満ち溢れている。いきおい、講義やゼミでの課題をこなす以外に読書をするのは少なくなりがちなのである。この現状は、様々な意味で問題があるのは間違いない。

しかし、かくいう私も、少年期から学生時代にかけて、読書にそれほど励んでいたわけではない。むしろ、学校の宿題を片つけた後は、「8時だよ全員集合」や「みごろたべごろわらいごろ」などといった、当時のPTAが「俗悪番組」と名指しするような番組を、口をポカンと開けて見ていた。また、受験生の時代は、「三宅祐司のヤンバラ」や「オールナイトニッポン」などを聴いて、貴重な時間を空費していたのを思い出す。このように、典型的なテレビっ子だった私は、日本や世界の文学作品など、当時ほとんど読むことがなかった（これらの知識は、これまたテレビで放映していた「世界名作劇場」や「まんが世界昔話」で辛うじて吸収していた）。

もともと、時代劇や大河ドラマが好きだった関係で、歴史小説だけは割合によく読んでいたように思う。特に、1985～86年にNHKで放映された池波正太郎原作の「真田太平記」には大変はまった。この物語は、真田昌幸・信幸・幸村父子や真田家に仕える忍びの衆（「草の者」）との間で織り成される人間関係を視点として、戦国時代後半の興亡を描いていったものである。ドラマでは、真田親子を演じる丹波哲郎や渡瀬恒彦、草刈正雄の演技もさることながら、真田に毎度の如く、一杯食らわせられる二代将軍・徳川秀忠の中村梅雀の演技が特に秀逸であった。このドラマを見終わった後、いまだ余韻が残るなか、私はこの「真田太平記」の原作本12巻を一気に読み通したのを記憶している。これが、私にとっての最初のまともな(?)読書経験であったと思われる。

上州と信州に僅かな領地を持つ小大名にすぎない真田

家が、武田・北条・上杉・徳川といった近隣の巨大勢力に臣従そして離反を繰り返しながら、また時にはこれらを手玉に取りながら、最終的に江戸幕藩体制の下で信州松代藩としてしぶとく生き残っていく様は、なかなか見ごたえがあるものである。

しかしながら、この真田家の様を見てみると、現在の北朝鮮の姿にどことなく似ているように見える。なぜならば、北朝鮮も真田家と同様か、国力的にはそれ以上に取るに足らない存在であり、その周囲には、中国やロシア、日本、米国といった北条や上杉以上の巨大勢力に取り囲まれているからである。しかも、北朝鮮の金正日將軍は、核開発危機を煽り立てることで、米国や中国、日本などの大国を翻弄し、自国の存在感をその国力以上に大きく見せることを通じて、自らの生存を確保している。実際に謀将・真田昌幸に劣らない「食わせ者」である（もともと、真田父子は信濃の領民から慕われていたとされている一方、北の將軍様は、多くの人民を苦しめている点で、両者の間には天と地ほどの開きはあるが）。

現在、私が研究者として、日本外交や国際政治を勉強している原点に「真田太平記」を通して見た「小国の生き残りの知恵」に対する関心があると考えてみても、あながち的外れでもないような気がする。他方、海千山千の北朝鮮外交と対照的に、日本外交は、戦後においてきわめて愚直なほどに米国に対して協調姿勢を保ってきた感がある。実にその様子は、父や弟と袂を断って、ひたすら徳川幕府に臣従する真田信幸のようだ。そこで、日本が真田家の如く、米国や中国といった大国に一杯食らわせる場面も、たまに見てみたいという気持ちにもかられるが、無理だろうか。信幸とて、最後まで真田六文銭の意地と誇りは忘れていなかったのだから。日本が真田家や北朝鮮よりも、はるかに国力的には恵まれているのは確かである。しかし、より現実的に考えると、仮に、米国や中国が「日本に一杯食らわされた」後、いかなる報復措置で応酬するのか想像するのも、恐ろしいといえは恐ろしいのではあるが…。

Javaと オブジェクト指向 プログラミング

文=松崎博季

(まつざき ひろき/工学部助手)

本学赴任直後にJavaを知り、知人から「これからはJavaだ!」という話を聞いたこともあって、Javaの独学を始めた。Javaはサン・マイクロシステムズ株式会社が開発し、現在も拡張、改良が行われているプログラミング言語である。当初はウェブ・ブラウザ上でアニメーション表示などができるアプレットに注目が集まっていたようであるが、現在はインターネット上で買い物ができるショッピング・サイトの構築や、携帯電話などのアプリケーション（たとえば、NTT Docomoのiアプリ）などに広く利用されている。利用範囲はますます広がっているようであり、それはJavaがそれまでのプログラミング言語の良い部分を取り入れながら、ネットワークや画像、映像、音声などマルチメディアにも対応し、「Write once, run anywhere」（一度プログラムを作成し、コンパイルすればWindowsやMacなどプラットフォームに関係なく実行できる）という特徴によるところが大きいと思われる。

Javaの独学を始めてしばらくのうちは、理解するのに問題はなかった。文法がC言語と似ていたためである。ところがあるところから理解するのが難しくなるところがあった。オブジェクト指向である。オブジェクト指向に触れたのはJavaが初めてではなかったが、本格的に取り組んだのは初めてであった。オブジェクト指向は人間向きの考え方を取り入れたものらしい。なのに、これが本当に難しい。どうやら難しいと思っている人の方が世の中には多いらしいということはわかった。文法や概念は理解できるので、書籍などに書いてあることをまねてJavaのプログラムを書くことはできる。しかし、オブジェクト指向の必要性がよく理解できない。オブジェクト指向を利用しなくてもまったく同じ動作をするプログラムが書けるからだ。それまでCやFortranといった手続き

型のプログラミング言語しか知らない固い頭には即座に理解するには厳しいものがあつた（“あつた”ではなく、“ある”が正しいか?）。さて、そうこうするうちに、「Java言語で学ぶデザインパターン入門」（結城 浩著、ソフトバンク パブリッシング）という本に出会った。これは、The Gang of Four (GoF、ゴフ）と呼ばれる4人の開発者がまとめた「オブジェクト指向における再利用のためのデザインパターン」を、Javaを使って初心者にも分かり易く記述した本である。この本を読んで、例題にあるプログラムを実際に試すことで、初めてオブジェクト指向の素晴らしさの一端に触れた気がした。それまで、「何故こんな概念が必要なんだ?」と思っていたものが、「なるほど、こういうわけだったのか!」と（ほんの少しだが）思えるようになった。

昨年（2004年）11月26日に札幌で、Java Festa in SAPPORO 2004というイベントが開かれ、その後のパーティーに出席する機会があり、サン・マイクロシステムズ株式会社のJava Web Services Staff EngineerとJava Technical Evangelistという肩書きの方お二人に直接お話を伺うことができたのだが、これからはオブジェクト指向プログラミングを学ぶべきだと仰っていた。また、聞くところによると、現在、Javaプログラマのニーズは高いらしい。一方でJavaを授業で教えている日本の大学はそれほど多くないそうである。オブジェクト指向の真髄を理解し、Javaを自由に使いこなせるようになれば、情報化社会の最前線で活躍できる技術者になることも可能である。そのような卒業生が本学科から少しでも多く出せるように、学生さんを指導できる自分自身の能力を高め続けなければならないと思う次第である。

図書展示会の歩み

昭和62年4月、現図書館が新築開館し、同年10月6～7日、本学会を会場として第36回日本図書館学会研究大会及び臨時総会が開催されました。その際に、記念事業として第1回「北海道関係古文書展示会～北駕文庫所蔵～」(昭和63年9月8日～)を催したのが本学会図書展示会の始まりとなりました。この第1回展示会では、北駕文庫(明治時代以前の古文書の文庫(31,000冊所蔵))の図書の内、松浦武二郎著作等の北海道関係古文書35点を展示公開し、解説目録を配布しました。

そのときの図書館だよりの記事を紹介すると、「北駕文庫初御目見得—これら古文書の時代を経ても薄れぬ鮮やかな色彩や、古式ゆかしい墨跡の妙は、見る人の心を引き付けて止まないものがあります。レトロブームの昨今、古文書の美術的・歴史的価値に触れると共に、内容にも興味が湧いてくるのではないのでしょうか。これを機に図書館では、特色ある常設展示場を目指したいと思います。」とあり、その後、今日まで北駕文庫と図書館の本を各回の異なるテーマの下で紹介してまいりました。次は、第1回～43回までの開催テーマ一覧です。

第1回～第43回開催テーマ一覧

第1回「北海道関係古文書展示会～北駕文庫所蔵～」

昭和63年9月8日～

○北駕文庫所蔵の松浦武二郎著作等の北海道関係古文書

第2回「昭和24～63年；学園大出版物40年に見るキャンパス・グラフィティ」昭和63年10月～

○研究紀要・学園、大学、学生出版物

第3回「スニーカー気分で地球を歩こう展～国際情報いろいろ～」平成元年1月～

○国際交流／国際情報／各国情報源／留学資料

第4回「僕の快適大学生生活術展」平成元年3月～

○学生生活ガイド・生活／就職情報誌

第5回「近代文学絵巻～漫画と雑誌で綴る明治・大正・昭和～」平成元年6月～

○芭蕉300年／とんやれ節／漱石・藤村・直哉原稿(復刻)／夢二と少女雑誌／賢治／佐藤春夫・実篤・里見の寄書／多喜二／昭和20年代創刊雑誌一般／戦後の主要文学賞／主要文学誌一覧

第6回「教科書のあゆみ展～教育史にみる日本教育史～」

平成元年9月～

○寺子屋の教科書／文明開化の教科書／明治10年代／教科書検定小史／～明治36年～国定教科書時代／昭和10年代～戦時教科書時代／昭和20年～終戦の教科書／戦後の教科書

第7回「ブックデザインは時空に輝く！～古今東西ブックデザイン展」平成元年12月～

○世界の先端ブックデザイン／美しい本：金・銀・宝石・革・織物・和紙装本／おもしろい本：とびだす本・ホログラフィックな本／先端印刷技術・18～19cの西洋近世のブックデザイン／江戸のブックデザイン

第8回「雑誌創刊号展～日本の雑誌創刊号100種～」

平成2年4月～

第9回「北海道の植物展(1)～佐藤謙先生コレクションより～」平成2年6月～

○北海道の森林と高山の代表的な植物の標本／落葉広葉樹林・針葉樹林・高山植物

第10回「世界の絵本展～14カ国の絵本を展示～小池直子先生コレクションより～」平成2年9月～

第11回「北海道の植物展(2)～佐藤謙先生コレクションより～」平成2年6月～

○大雪山等道内各地の植物の標本／高山植生・湿原植生・砂丘植生・噴気孔の植生

第12回「出版ジャーナリズムのルーツを探る～18～19cヨーロッパ雑誌出版史展～」平成2年10月～

○英国、ジェントルマンズ・マガジン 1731～1907etc.本学所蔵外国雑誌から古い刊行年順に紹介(50誌)

第13回「出版・造本技術展～編集から印刷・製本まで～」

平成3年1月～

○出版編集とは／「図書館だよりの編集過程／レイアウト／電算写植から印刷へ～写真パネル展示～カラー画像処理システム／北海学園大学経済学論集ができるまで／本造りの技術／製本のしかたと道具・材料／本の解剖学／構造と形態

第14回「『漂流』大黒屋光太夫と松浦武二郎『同時代』展」

平成3年7月～

○幕末・鎖国下の海外情報と蝦夷地探検／松浦武二郎他探検家たちの著作・漂流記と海外事情記／大黒屋光太夫関係文書

第15回「北海道・マサチューセッツ州姉妹提携記念 北・マ交流史展」 平成3年11月～

○北海道・マサチューセッツ州交流史／マサチューセッツ州出身著名人の著作／北海道と日本に関する英文書誌

第16回「“スペインの本” 展示会～コロンブス／アメリカ大陸発見 500周年からバルセロナ五輪まで～」

平成4年5月～

○スペイン史／紀行／美術／文学

第17回「北駕文庫所蔵 国文学・漢籍貴重書展～1992年度 和漢比較文学会開催記念～」 平成4年9月～

第18回「外国人の見た日本展～不滅の「日本学」研究書～」 平成5年4月～ (人文学部開設記念)

第19回「日本法史展～古代法から江戸は大岡裁きの世界、明治は近代法の誕生まで～(本学、北駕文庫所蔵古文書より)」 平成5年11月～

第20回「古文書でみる日本経済思想400年史(江戸時代～現在)展～(本学、北駕文庫所蔵古文書より)」

○江戸時代の経済概念／江戸時代の重要経済書：熊沢萬山「集義和書(1676)」／宮沢安貞「農業全書(1697)」／～維新後の西洋経済思想の移入：スマイルス「西国立志編」／日本近代経済学の成立～リスト「李氏経済論」／山崎寛次郎「経済原論」

第21回「日本列島自然災害」展～地震と噴火の本～

平成7年4月～

○日本の自然災害に関する図書

第22回「仏教・神道」展(本学、北駕文庫所蔵古文書より)

平成7年9月～

○融通大念佛本縁起 1691(元禄4)／一七憲法和解／黒谷 法然上人一代記 1666(寛文6)／梵語千字文 1773(安永2)

第23回「秀吉」展～(本学、北駕文庫所蔵古文書より)

平成8年3月～

第24回「“宮沢賢治100年・石川啄木110年”展～岩手・同時代の詩人たち～」 平成8年7月～

○宮沢賢治の本～絵本：銀河鉄道の夜・注文の多い料理店・春と修羅／石川啄木の本～一握の砂・悲しきがん具・歌集・啄木と札幌

第25回「古辞書展～元時代の漢字辞書から明治時代の英和辞典まで～」 平成8年12月～

○1351 六書正譌(りくしよせいか：復刻版)／1575 本朝事始／1617 和名類聚鈔(わみやうるいしゅうしよう)／1680 節用集大全

第26回「毛利元就と長州維新展～山口県人の系譜」

平成9年3月～

○毛利元就自筆書状(復刻)／毛利記／大内書状／吉川系譜／厳島の戦い・宮島

第27回「北海中学の青春群像～北中・札商著名卒業生14人にみる北中精神の研究」 平成9年8月～

○南部忠平氏／若松勉氏／本郷新氏／寒川光太郎氏／和田芳恵氏／子母沢寛氏／島木健作氏／野呂栄太郎氏／沢田誠一氏／坊屋三郎氏／早坂文雄氏

第28回「外国人が見た幕末・維新展」 平成10年6月～

○開国～黒船来航：ペリー／ハリス／徳川慶喜／モース／シーボルト／オランダ商館／ケンペル／漂流記／外国人がとった幕末・維新・明治期の写真

第29回「忠臣蔵」展 平成11年6月～

第30回「江戸・明治期のスポーツと音楽・娯楽展」

平成12年8月～

第31回「古地図展～世界古地図の中の日本と江戸街図／大正～昭和期・札幌市街図の変遷～」 平成13年1月～

第32回「大相撲」展 平成13年4月～

第33回「教科書」展 平成13年7月～

第34回「法学・経済学を学ぶ人のためのレファレンス(参考)資料展」 平成13年9月～

第35回「浮世絵展」 平成13年11月～

○近世日本風俗絵本集成

第36回「日本小説史展～明治・大正・昭和の小説～」

平成14年3月～

○安愚楽鍋／我輩は猫である／伊豆の踊子

第37回「日本児童文学史展～明治・大正・昭和の児童文学～」 平成14年9月～

○日本児童文学館：名著復刻より

第38回「上原文庫展」 平成15年3月～

○本学の初代学長、上原鞆三郎先生の蔵書

第39回「雑誌創刊号展～雑誌創刊号はその時代の風を感じさせる～」 平成15年7月～

第40回「シベリア洞窟画巡り～原始人の落書き～」

平成15年11月～

第41回「古建築探訪～城、寺院、民家～」

平成16年5月～

○札幌の建築探訪／法隆寺～世界最古の木造建築～／ヨ一ロツパ建築600選

第42回「社会環境と地震・防災展～環境を考える本／地震・防災の本～」 平成16年12月～

○環境・景観工学／地震記録・耐震建築等関係資料

第43回「高倉新一郎文庫展～(1902(明治35)～1990(平成2))元本学学長 北海道史研究の泰斗・本学図書館所蔵文庫より～」 平成17年6月～



休息のための読書

文＝穴澤 務

(あなざわ つとむ/経営学部教授)

私は、学者としては致命的なほど読書が苦手な人間である。寝床で本を読もうとして枕を高くすると、首が疲れてしかたがない。逆に低い枕で読書をすると腕が疲れる。列車やバスで本を読むとすぐに乗り物酔いを起こしてしまう。だから、椅子に座って机に本を置いて読むしかないのだが、その姿勢も長時間続けることができない。それ以前に、ほんの数ページですぐに眠くなる悪い癖がある。

この調子だから、当然長編小説は苦手である。ヘルマン・ヘッセや石川達三の作品を好んで読んだ時期もあったが、最後はいつも息切れ状態で、読後には感動よりも疲労が残ることが多かった。そのせいだろうか、今でも食わず嫌い状態で手をつけていない文学作品が数多くある。芥川、太宰、三島などといった文豪の作品には、国語の教科書を除けばまったく縁がない。

だからといって、活字アレルギーかというともうでもない。週に一、二度、市内の某温泉で風呂上りのビールを流し込みながら、週刊誌で芸能人や政治家のゴシップ記事を追いかけるのは、私にとって至福のひと時である。また、Yahooなどに掲載されるインターネット上のニュース記事は、その即時性も手伝って新聞よりも好んで読んでいる。

このような私が自らすすんで読む本となると、どうしても短編の小説集やエッセイ集になってしまう。私が一時期夢中になって読んだのは、『O・ヘンリー短編集』（大久保康雄訳、新潮文庫）である。とにかく、一編一編が短くて、歯切れがよい。また、あつと驚く結末の連続で、読んでいて実に気持ちがいい。それでいて、人情味溢れるエピソードがそこかしこに散りばめられており、読んだ後には爽快感だけでなくある種の感慨すら覚え

る。短編集の中で私が妙に気に入ったのは「心と手」という作品で、そこには古きよき時代のアメリカで、護送囚に対して粹な計らいをするジェントルな保安官の姿が、最後のどんでん返しとともに描かれている。この短編集は、自分の生活が順調だが少々退屈だと感じるとき、一服の清涼剤として読むのに適していると思う。

逆に、精神的に苦境に立たされたとき、私の場合は小説よりもむしろエッセイを欲する傾向がある。私が一時期すがりついたのは、五木寛之のエッセイ集『生きるヒント』（角川文庫）である。彼の語り口は常に穏やかで、押し付けがましくない。彼は仏教を思想的背景とした物事の見方を展開するが、宗教的な胡散臭さは微塵もなく、むしろ自然に私の心に浸透し、不思議な納得をもたらす。特に感慨を覚えたのは、シリーズ2の「出会う」の章にある一節である。「がんばりなさい」と励ますことに疑問を感じる氏の、「痛みを泣いている人に、戦え、と励ますのは人間ではない、とほくには思えてならないのです。…（中略）…心が痛み悲鳴をあげている人には…（中略）…ただ、こちらもおろおろしながら、横で涙を流して黙っているしかないのです。」という語りかけは、その当時おのれの無力感に苛まれていた私にとって大きな慰めになったことを覚えている。

私は本稿で、決して読書のすばらしさを説こうとは思わない。だいたい私のような「少読家」にそのような資格はないし、むしろ読書をスポーツや芸術と同じように趣味の一ジャンルと捉えてもよいと思う。ただ、今の趣味に少々飽きてきたとか、人生に行き詰まりを感じたという人には、上記のような短編集を手始めに読書することが、程よい心のリフレッシュになるのではないかと、私は自分の経験から感じている。

編集後記

こんにちは、ビッグフットです。連休の続く今日この頃、みなさんいかがお過ごしでしょうか。秋という季節もあつてか、スポーツをしたり芸術に触れたりする機会も多いのではないかと思います。もちろん食の秋（食い倒れ?）も。

実は、スポーツと食には困らないビッグフットなのですが、芸術にはまるで縁がない。そこで図書館の出番です。3階の700番台には、美術・写真・音楽・演劇などの芸術分野の図書が、たくさんあるのですよ～。かなり芸術の匂いが強いモノからほのかに香るモノまで揃っています。今年はここで足りないものを補おうと計画中のビッグフットでした。

勉強以外にも役立つ本がたくさんあるので、ぜひ図書館を利用してみてください。

北海学園大学附属図書館報 図書館だより 第27巻3号 (通巻175号)

本館 〒062-8605 札幌市豊平区旭町4丁目1番40号 工学部図書室 〒064-0926 札幌市中央区南26条西11丁目1番1号
TEL (011) 841-1161 (本館内線) 2273・2274・2275 (工学部内線) 7813・7814 印刷所: (株) アイワード